

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	猪子 秀太郎 森 浩一
学力向上推進員	教諭(教務課長)	渋谷 恵理子
委員	教諭(小・中学部長) 教諭(高等部長) 教諭(支援課長)	田中 敦子 上田 英見 児島 正典

2 学力・学習状況における現状分析、目標等

【3つの視点】

- (1)基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3)主体的に学習に取り組む態度の育成

( 高等部 ) 幼 児 児 童 生 徒 の 状 況		
よさ	学校生活全般において、生徒それぞれまじめに学習活動に取り組んでいる。 2・3年生においては、卒業後の自分の進路についての学習を進めるなかで、自らの将来について考えることができるようになってきている。特に3年生については、一年一年経験を積み重ねることで自信が付き、大きな成長が見られる。	課題 障がいが多様化してきており、学習面や生活面において、個々に配慮が必要な生徒が多い。 校内でできていること(あいさつ、返事、報告等)が、校外等に出て場面や環境が変わるとできない生徒が多く、般化に課題がある。
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標
・卒業後の進路先や生活を見据えて、自分の課題に気づき、(自分の目標を知り)、目標達成にむけて主体的に取り組むことができる。 ・学校生活(教育活動)や就業体験において、適切な進路選択ができるよう、くらす・はたらくのスキルアップをはかる。		・学校生活や就業体験を通して、個々の生徒が自分の課題に気づき、その課題の克服に向けて主体的に取り組めるよう、学習の機会を設定する。 ・個別の指導計画の前期目標または後期目標に、アセスメント(TTAP)に基づく課題を一人につき2個程度設定し、その評価が「達成」「ほぼ達成」となる割合が60%以上となる。
		達成状況
		・学校生活全体、就業体験を通して、個々の生徒が自分の課題について考える機会を設定することができた。 ・個別の指導計画の前期目標または後期目標に、アセスメントに基づく課題を一人につき2個以上設定することができた。44個の目標が設定され、その評価について「達成」「ほぼ達成」の割合が、86%であった。 評価:A
具体的方策(教員の取組)		取組指標
・1年生については、入学年に個々の生徒の実態に応じたアセスメントを実施する。2・3年生については、1年次に実施したアセスメントから客観的な指標に基づいた実態把握を行う。 ・アセスメントの結果より、課題となる項目について、個別の指導計画の前期目標または後期目標に設定する。 ・個別の指導計画の前期目標ケース会、後期目標ケース会において、アセスメントからの課題が目標に設定されているか確認し、支援方法等について共通理解を図る。		・新入生は、6月ごろまでに個々に応じたアセスメントを実施する。 ・2、3年生は、1年次に実施したアセスメントの結果に基づいた実態把握を行う。 ・アセスメントの結果から出た課題を個別の指導計画の前期目標または後期目標に、一人につき2個程度設定する。 ・前期目標ケース会、後期目標ケース会において、個々の生徒のアセスメントからの課題について、共通理解を図る。
* 中間期の見直し なし		取組状況
		・新入生について、個々に応じてアセスメントを実施することができた。 ・2・3年生については、1年次に実施したアセスメント結果を確認し、実態把握をすることができた。 ・個別の指導計画の前期目標または後期目標設定時に、アセスメントから出た課題を設定することができた。(一人につき3個以上設定されていた。) ・前期目標、後期目標ケース会において、個々の生徒のアセスメントからの課題について、共通理解を図ることができた。
達成状況を踏まえた改善事項		
今回の取り組みを行った結果、学期初めにアセスメント結果を確認することで生徒の実態把握ができたこと、また検査結果から生徒それぞれの課題がわかり、個別の指導計画の目標立案時に反映できたことは、支援を行ううえで大変有効であった。達成率が高かった要因として、アセスメント結果に基づく妥当な目標設定がされていたこと、また目標達成に向けての指導の手だてが有効であったことが考えられる。 高等部の生徒は、卒業までの3年間で、個々の生徒に応じて卒業後の生活に必要なスキルを見極めて学習をすすめていかなければならない。そのためにアセスメントを行うこと、またアセスメント結果と個別の指導計画の関連が重要になると考える。今後も継続して、意識的に取り組めるようにしていきたい。		